

# 金華山におけるシカと人との関係

## —近世から近代—

水谷 知生・平 侑子

### 要旨

本研究では、野生生物を観光対象とする形態の一つとして、シカと人との近接関係が観光として成立する背景の整理を試みるため、宮島、奈良とともに近接関係が古くからみられる宮城・金華山でのシカと人との関係の経過について、近世から第二次世界大戦終結前の時期までの検討を行った。近世から近代の紀行文、案内記類、絵図類を用いシカと人との関わりの記述内容、シカと人との関係の描き方を検討することにより、シカへの餌やりが始められた時期、人との近接関係が形成される経過を明らかにした。

1700年代後半から1800年頃までには、金華山の船着場から寺社境内までの間でシカと人の近接関係が成立した。絵図での描き方、シカの餌の販売状況などから、近接関係を観光対象として利用する意識は小さいが、明治期中頃から金華山の象徴としてシカが描かれ、また、来訪者にとって近接関係が好意的に受け止められたこともあり、第二次大戦終結時までには近接関係が継続していたことが確認された。

キーワード：金華山、シカ、野生生物、観光、餌やり

### 1. はじめに

野生動物への餌付けは、生態系のバランスの崩壊、疾病リスクの増大、人間の生活圏への過度の接近といった面で影響を及ぼすことが指摘されている<sup>1)</sup>。観光目的での餌付けは野猿公苑でのニホンザルへの例が代表的なものとしてあげられる。ニホンザルへの餌付けは研究手段として始められ、大分県高崎山で1953年以来観光客の誘致に成功し、全国に野猿公苑が設けられ1972年時点で35苑が開苑され観光対象となっていた。しかし個体数の急増、周辺の農作物被害などを背景に、多くが閉苑となっている<sup>2)3)</sup>。シカについては「金華山島、奈良公園、宮島などでは観光目的で行われており、奈良、宮島は特に歴史の古いもの」<sup>4)</sup>、「奈良公園のシカも餌付けの著名な例(中略)、餌付けされたシカ宮城県金華山、広島県宮島などでも観光資源として重要な役割を担っている」<sup>5)</sup>、「奈良公園や広島県宮島、宮城県金華山では神鹿と呼ばれて、長年にわたって餌付けが維持されている」<sup>6)</sup>と言及され、シカへの餌やりは奈良公園、広島県の宮島、宮城県の金華山で行われるものが代表例とされる。シカに関し、餌付けによって奈良公園では隣接する春日山原始林での森林構造の変化、宮島や金華山での森林植生、森林構成への影響を与えていることが指摘される<sup>7)</sup>。シカにより森林植生への影響が生じている事実はあるが、餌付けとの関係は必ずしも明らかではない。

一方で、動物への餌やりについて石田(2013)は、「そこに動物がいれば、「餌」を与えようとする」、「動物に餌を与えるのは、「ごく自然」な行為のようにみえる」<sup>8)</sup>とし、矢野(2000)の、動物に餌を与え、それを受け取った動物が食べる姿を見ることに、不思議な幸福感を味わうことは、「餌をやるという行為が相手からの返礼をいっさい念頭におかない無償の行為であり「純粋な贈与」だからである」<sup>9)</sup>という論に言及する。人による動物への餌やりは、機会があれば自然に生じる現象と考えられる。

このような状況で、奈良のシカは、人に馴れた状態が評価され天然記念物の指定を受け、その保護計画が策定されている<sup>10)</sup>。当該計画では鹿せんべいによる収益がシカの保護活動の財源とされ、餌やりを介したシカと人の関係は継続的に維持すべきものと位置づけられている。来訪者による餌やり

は、18世紀中頃から行われてきたが<sup>11)</sup>、1913(大正2)年から餌である煎餅の売り上げがシカの保護を進める資金として利用されるようになる<sup>12)</sup>。シカと人が近接して共存するためには、農林業被害や人身被害に対応することが不可避になるが、奈良公園では、明治中期頃から夜間に鹿苑で保護するために集める目的で鹿寄せ(給餌)が始められ、シカが公園外に移動し農作物被害を及ぼすことの防止も目的としていた<sup>13)</sup>。角伐りは17世紀に来訪者の事故防止の目的で始められた。シカを保護し観光利用することに伴う被害対策をあわせて行ってきたのは、明治以降は神鹿保護会(現在の奈良の鹿愛護会の前身)である。奈良のシカは、春日神社の神使としての位置づけから、厳しく殺傷を禁じられる対象として地域住民から距離を置く存在であり、また、周辺の農業者にとっては加害獣であった。シカを保護し観光利用する者と地域住民は利害の対立する関係であり、この関係を調整する仕組みや組織は必要不可欠であった。

シカへの餌やりを行う場所として奈良とともに取り上げられてきている宮島、金華山では、シカと人との関係はどのような状況だろうか。宮島では2009(平成21)年に餌やりの禁止とゴミの管理の徹底による個体数管理を対策の柱とした「宮島地域シカ保護管理計画」<sup>14)</sup>を廿日市市が策定し、食べ物を与えないことを啓発し、市街地での個体数を減少させる方針をとっている。宮島のシカと人との関係については、水谷・平(2023)において近世以降の状況についてまとめている<sup>15)</sup>。奈良ではシカの神聖性をベースに人との関係が構築されたが、宮島ではそうでないこと、宮島ではシカによる農業被害が生じなかったこと、山と市街地が隣接し、人とシカが日常的に接する環境であることの違いを背景として、市街地でのシカへの対応が奈良とは異なっていた。宮島ではシカは市街地に現れ、町民はその存在に寛容で、近世から鹿桶などで餌やりが自然発生的、継続的に行われ、来訪者による餌やりも行われてきた。明治期以降、観光対象となっていくが、餌やりの管理や人身被害防止といったシカと人が同所に共存するための持続的な保護管理体制はとられなかった。第二次世界大戦後はシカ個体数の激減から、町が飼養場を設けるが、その後の個体数の増加とともに1970年代の住民による被害

## 論文

の訴えが生じ、結果として餌やりを行わない方針となる。宮島にとってのシカは、被害に対応しながら餌を与え続け、市街地での共存を図るべき対象ではなく、組織的に餌やりや個体群の管理を行う対象にはならなかった。

野生動物と人との近接関係を対象とした観光は、その場所で当該野生動物と人が共存すべき背景がない場合、持続的に行うことが困難なのであるか。宮島、奈良とともにシカと人との近接関係が古くからみられる金華山は、島の面積は宮島のほぼ3分の1で神社関係者以外に島内に住民がいないといった条件の違いがある。本稿では金華山のシカと人との関係の経過について検討を行う。シカへの餌やりが始められた時期、その後どのような経過をたどって人との近接関係が構築されるようになったのかを明らかにする。

## 2. 近世以降の金華山への来訪者

近世には金華山は参詣者を集め、金華山信仰が形成されていたが、これは弁財天に対する信仰で、商売繁盛・開運等の現世利益的を祈願する信仰が民衆の中に流布されていったことにより、各地から登拝者が島に渡った<sup>16)</sup>。各地に金華山講が組織され、昭和40年代後半の黄金山神社神職の話によれば、その当時でも約500の講中があり、山形県、福島県、宮城県、岩手県、秋田県、北海道、千葉県の順に多く<sup>17)</sup>、東北地方を中心に金華山を参拝する者は少なくなかった。金華山へ渡る径路について、1975年頃の状況を図1に示したが、近世には、石巻あるいは渡波(わたのは)から海路で鮎川浜に至り、そこから陸路で一の鳥居を越え金華山島の対岸の山鳥に降りることが一般的であった。山鳥には「山鳥庵」という休息所があり、参詣者の人数が揃うと鐘楼の鐘をついて金華山に知らせ、対岸から手漕ぎの渡し船を出して参詣人を迎えに来た<sup>18)</sup>。1887(明治20)年に塩釜への鉄道延伸<sup>19)</sup>以降、不定期ではあったが塩釜-金華山航路に各社の参入が増え、一方で山鳥から島へ渡船事業を行う者もあらわれた。大正期に入ると1912(大正元)年の石巻までの鉄道敷設<sup>20)</sup>にともない石巻-金華山航路も開設される。大正後期には塩釜と石巻により金華山参詣客の奪い合いが激しくなり、塩釜、石巻からの直行便が運行されることにより、鮎川から陸路山鳥に至り渡船で参詣する者は減

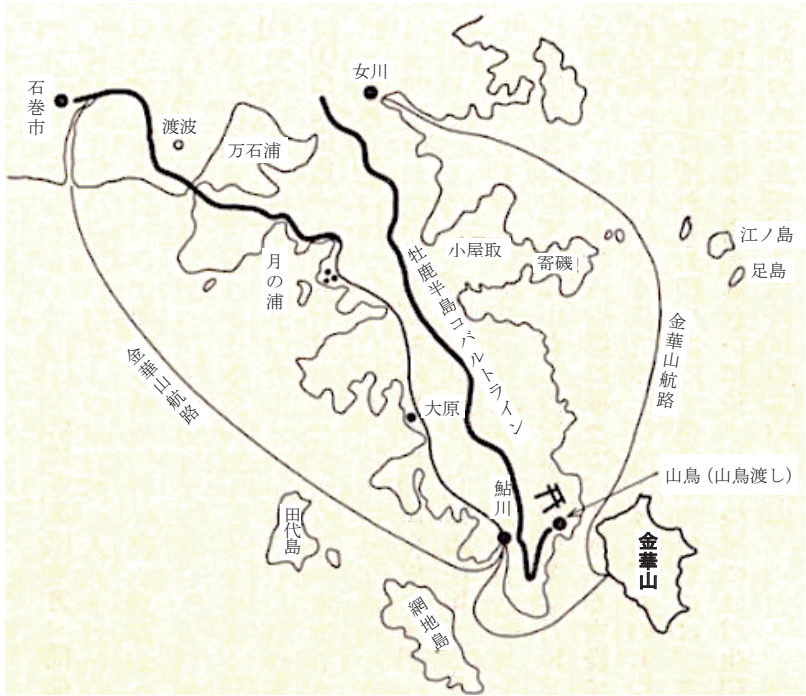


図1 1975年頃の金華山への交通図(岩崎敏夫編(1975)『東北民俗資料集4』より、現在は鮎川と女川からの航路がある)

少しした<sup>21)</sup>。1936(昭和11)年には女川—金華山航路も開設され、戦後も3航路があった。一方、昭和初期には牡鹿半島の道路の改修が進み、石巻—鮎川間のバス路線が開設され、戦後もさらに道路改修が進み1971(昭和46)年に牡鹿半島にコバルトラインが開通、塩釜からの航路は廃止される。現在は、鮎川と女川からの航路が金華山への径路となっている。

金華山への来訪者については、1925(大正14)年度に参詣者数10万人という記録があり<sup>22)</sup>、石巻、塩釜からの航路開設により相当数の来訪者があったようである。戦後の来訪者数は、宮城県観光課の調べとして1963(昭和38)年度から1966(昭和41)年度の間に、約20万人から36万人との記録がある<sup>23)</sup>。その後、2002(平成14)年度から2010(平成22)年度までの間は、年

## 論文

間5万人～10万人程度で推移するが、東日本大震災による影響で減少し、2013(平成25)以降は1万人～2万人の来訪者数となっている<sup>24)</sup>。

### 3. 近世の金華山のシカと人の関係

#### (1) 近世資料での金華山のシカと人

近世に金華山詣がさかんになるにつれ、島の様子が紀行文で紹介されるようになるが、紀行文で記された金華山でのシカと人の関係については、金華山黄金山神社(1989)、阿部(1999)が整理を行っている<sup>25)</sup>。近世後期以降に庶民が書き残した旅日記である「道中日記」は、奈良のシカと人との関係を明らかにする資料として有用性が確認され<sup>26)</sup>、金華山詣の道中日記について検討した。市町村史等で翻刻されている道中日記が少なく、公文書館蔵の道中日記も含め数点について調査したが、これまでのところシカについて記されたものは確認できていない<sup>27)</sup>。

近世の紀行文、案内記で金華山に訪れて記述されたと考えられるものを抽出し、シカと人の関係についての記述内容を表1に示した。

表1 近世金華山訪問者の紀行文にみるシカと人の関わり

No	発行年	書名	著者	シカに関する記述	備考
1	1697 元禄10	陸奥千鳥	桃鄰	シカに関する記述なし、動物に関し「鶯罫を求めねば、ほととぎす啼かず、・・南の磯に海鹿(あしか)日を待ちて眠る」	28)
2	1715 正徳5	金華山紀行	朱桃	シカを含め動物に関する記述なし	29)
3	18世紀後半	笈埃隨筆	百井塘雨	シカを含め動物に関する記述なし	30)
4	1771 明和8	奥遊日記	池川春水	此島殺生を禁す。獸は鹿と猿とのみ。昔鹿の渡り初し時、猿も鹿に乗て渡りけると云。鹿とく人に馴れて手に持たる物を来り食ふ。給仕せし小僧語りて云、昔政宗公此山に來り給ひ、禁を破りて鹿を打給ふ。山震動しける事甚しかりけると也。其時打給ふ大鹿の角なりとて、今も権現の社の内にありと云。	31)
5	1777 安永6	奥州紀行	富田伊之	シカを含め動物に関する記述なし	32)
6	1795 寛政7	東遊記	橘南谿	シカを含め動物に関する記述なし	33)

金華山におけるシカと人との関係

7	1800年代 初頭頃	奥州名所図会	大場雄淵	鹿はかしこくて人に馴ず、鹿は頓(にぶく)てしたしみ安く人跡を慕ひて山中多くは庭中に来り遊ぶ事南都春日の社地の如し、○大神宮の使ハしめなりと云う。時々群猿鹿の海を渡らん時を伺得て、争来り鹿の背に跨りて海上にのり出す、暫時海中に出で両手を以鹿の角を押へ頭を水中につき入て戯れとす、鹿の頭を揚て潮をふく、猿其勞を悟らずしてかくする事度々なり、性尽て鹿終に海底に沈んとす、猿此時に至り初めて驚て悲嘆すれども甲斐なし、	34)
8	1812 文化9	夢遊金華山之記	大槻玄沢	其石と石との間をまはりまはりて往来とす。これを行すきて寺内に南面に建てたる大伽藍あり、此登攀の前後より寺の内まで、鹿多く群居てよく人に馴る。(中略)山々谷々をたどり行くに、鹿ひとつ見たるまでにて、外に怪しきけものをも見ず、常は猿多くむれゐるといへり	35)
9	1816 文化13	日本九峰修行日記	野田成亮	シカを含め動物に関する記述なし	36)
10	1824 文政7	松島日記	矢尾板梅雪	シカを含め動物に関する記述なし	37)
11	1825 文政8	金華山詣	燕石斎薄墨	優も人に馴れたる鹿ハ己が餌を乞事青丹よし奈良の里にことならず	38)
12	1842 天保13	奥のしをり	船遊亭扇橋	シカを含め動物に関する記述なし	39)
13	1847 弘化4	虎勢道中記	江戸材木町通りの商人(氏名不詳)	此見世にて御山祝いとて菓子をすゝめ又は鹿へ土産なりとて拾八文づつにて握り飯を皆々へ賣つけ(中略)舟着よ利大金寺迄の間砂地にて庭中のごとく奇麗尤此節きりし満花さかりにて美し又鹿多く居て犬のごとく人を見て喰物を祢だる彼の茶屋より持来し握飯を皆々分て□□□遣りぬ夫より大金寺へ夕七ツ時頃參着泊ル	40)
14	1850頃 嘉永年間	金華山紀行	藤原広泰	此寺のゆきき毎に。鹿数多集ひ来て。人をも恐れずなるるなど。いと興に入たり。手より物を与ふるに。驚くけはへのなく。求食もをかしと。人々と共に菓子などやりて。しばし時を移したり。	41)
15	1853 嘉永6	おくの記行	大柏堂清風	山中処々に鹿数正遊び居て、参詣の人々に餌を乞ふ、菓子二而も与ふれば、手より直に喰ふ也、南都春日のごとし	42)
16	1854 安政元	諸国廻歴日記	牟田高惇	シカを含め動物に関する記述なし	43)
17	幕末頃	金華山記	伊能顥則	舟よりおるれば藤の花つつじ咲きみだれてを鹿むれつつ遊び	44)

まず、1696(元禄9)年、芭蕉門下の天野桃鄰が金華山を訪れ、俳諧紀行で「ほととぎす啼かず、・・南の磯に海鹿(あしか)日を待ちて眠る」と動物に関する記述がみられるが、シカ、サルについての言及はない(No.1)。金華山ではシカによって下層植生が失われ、ウグイスが少ないことは佐藤ら

## 論文

(1968)が指摘している鳥類相の特徴である<sup>45)</sup>。このような観察眼を持つ桃鄰が人に馴れたシカがいることを記述しないと考えるのは考えにくい。また、1715(正徳5)年3月に金華山を訪れた朱桃が『金華山紀行』を記し、案内されて回った島内の記述を詳細に残しているものの、ここでもシカ、サルにふれられていない(No.2)。

シカと人の関係についての記述で最も時期が古いものは1771(明和8)年4月の池川春水による『奥遊日記』で、シカが人に馴れて手から物を食べる様子が記されている(No.4)。1800年代初頭とみられる大場雄淵による『奥州名所図会』では「鹿はかしこくて人に馴ず、鹿は頓(におく)てしたしみ安く人跡を慕ひて山中多くは庭中に来り遊ぶ事南都春日の社地の如し」と、文脈はやや不明であるが、奈良のシカのように境内附近の人のいる場所に現れていることが記される(No.7)。その後、1812(文化9)年の大槻玄沢の『夢遊金華山之記』の「鹿多く群居てよく人に馴る」との記述(No.8)、1825(文政8)年の燕石斎墨墨の『金華山詣』の「優も人に馴れたる鹿ハ己が餌を乞事青丹よし奈良の里にことならず」との記述(No.11)がみられ、1800年代はじめ以降にはシカが人に馴れた状態がたびたび記されている。

1847(弘化4)年の『虎勢道中記』では、山雉渡の茶屋でシカの餌用に握り飯を十八文で売っていることが記され、それを島に渡ってシカに与えた記録がみられ(No.13)、嘉永年間(1850年頃)の藤原広泰による『金華山紀行』では「鹿数多集ひ来て。人をも恐れずなるるなど。いと興に入たり。手より物を与ふるに。驚くけはへのなく。求食もをかしと。人々と共に菓子などやりて。しばし時を移したり。」との記述がみられる(No.14)。また、1853(嘉永6)年2月に金華山を訪れた大柏堂清風による『おくの記行』での、「山中処々に鹿数疋遊び居て、参詣の人々に餌を乞ふ、菓子二而も与ふれば、手より直に喰ふ也、南都春日のごとし」との記述(No.15)から、1800年代中頃には、シカに与える餌が販売され、来訪者にシカが餌を求め、来訪者は握り飯や菓子を与える関係が成立していた。ただし、No.15の大柏堂清風の『おくの記行』の記述では、「山中」の所々にシカが数匹いて餌を求めるとされているが、山中でシカが餌を求めることは他の近世の紀行や後述する明治期の紀行でも



確認されないことから、清風が訪れた実体験に基づいて記述されたものではない可能性がある。

金華山では1700年代前半までは、シカが寺の周辺で人に馴れた状態にはなっていなかった可能性が高い。その後、1700年代の後半に人に馴れた状態になったのではないだろうか。『奥州名所図会』の「南都春日の社地の如し」(No.7)、『夢遊金華山之記』の「此登攀の前後より寺の内まで、鹿多く群居てよく人に馴る」(No.8)、『虎勢道中記』の「舟着よ利大金寺迄之間・鹿多く居て」(No.13)、『金華山紀行』の「此寺のゆきき毎に。鹿数多集ひ来て」(No.14)という記述から、寺の境内と船着場から寺への途上に人に馴れたシカが現れている。また、『奥州名所図会』の「大神宮の使ハしめなりと云う」との記述からシカが特別視され、大金寺でシカを人に馴らすような扱いがなされた可能性がある。なお、奈良の春日大社では祭神の武甕槌命が鹿島からシカに乗って御蓋山に降り立ったことからシカが神使として位置付けられているが、金華山においては近世の弁財天信仰と関連して蛇が特別に扱われるが、シカが神使と位置付けられるわけではない。

近世の金華山では、18世紀後半には大金寺周辺で人に馴れたシカが見られ、餌を与える関係が成立していた。奈良でのシカへ来訪者が餌を与える行動は、18世紀後半の来訪者の道中日記で初めて確認され<sup>46)</sup>、巖島では、貝原益軒が17世紀末に「町の民家の内に入れて物を食す」と記している<sup>47)</sup>。金華山では紀行文の事例数が多くはないものの、18世紀後半には人に馴れた状態が生じていたと考えられ、奈良での来訪者の餌やりが見られる時期と同じ時期に金華山でも餌やりが行われていたと考えられる。また餌の販売については1800年代中頃に確認されるが、どの時点で始められたのかははっきりしない。

## (2) 近世近代の絵図での金華山のシカと人

近世近代の金華山を鳥瞰的に描いた絵図については、これまで阿部が何種類かについて検討し、江戸期に刊行された『陸奥東海金華山正面図・霊山背面略図』(以下『正面・背面図』とする)と題された一連の木版図、それよりも

## 論文

時期が早いと考えられる絵画『金華山図』（仙台市博物館蔵）、明治20年代以降に発行された一連の銅版の『陸前国牡鹿郡金華山明細絵図／縮図』の存在を明らかにしている<sup>48)</sup>。これらの絵図も含め、19世紀以降に出版された金華山を描いた鳥瞰的な絵図について、シカの描かれ方を表2にまとめ、また各図の発行時期の関係性について図2の見取図にまとめた。図2で明らかのように、1814(文化11)年以降1883(明治16)年まで70年にわたり木版の『正面・背面図』が繰り返し再刻されている(1865(元治2)年版は銅版)。1889(明治22)年からは、ほぼ同内容の銅版の『金華山明細図絵』と『金華山略図』2種類が1897(明治30)年まで短期間に大量に刷られ<sup>56)</sup>、この後、1898(明治31)年の彩色石版の『金華山真景明細図』が大正年間まで出版され、鳥瞰的な絵図は刷られることがなくなり平面の案内図に移行したと考えられる。一連の『正面・背面図』より前に描かれた可能性がある絵図は3点あるが、いずれも作成時期が特定できない。

表2 近世近代の金華山を描いた鳥瞰的な絵図でのシカの描かれ方

No.	西暦	和暦	タイトル	作者・出版元等	シカの描かれ方	所蔵
1		江戸時代後期	金華山図	不詳	5頭(亀島前海岸2, 黒沢古寺地1, 本社拝殿前1, 拝殿下鳥居附近1)	仙台市博物館蔵
2	19世紀		奥州金華山図	不詳	No.1と同内容	東京国立博物館蔵
3	1829年以前		『奥州名所図会』挿画(木版)	大場雄淵	鳥瞰図にはシカ描かれず <sup>49)</sup>	『仙台領の地誌』 <sup>49)</sup>
4	1814	文化11	陸奥東海金華山正面圖・靈山背面略図(木版)	白石爛兮画, 大金密寺蔵板	7頭(黒沢古寺地3, 大金寺奥古寺地2, 鹿山付近草地2)	宮城県図書館蔵
5	1819	文政2再刻	陸奥東海金華山正面図・靈山背面略図(木版)	大金寺	8頭(黒沢古寺地3, 大金寺奥古寺地2, 大金寺前3)	個人蔵
6	1825	文政8再刻	陸奥東海金華山正面図・靈山背面略図(木版)	大金寺	No.5と同内容	個人蔵, 東京都立中央図書館蔵
7	1825	文政8	『金華山詣』挿画(木版)	燕石齋薄墨	黒沢古寺地1頭	宮城県図書館蔵
8	1837	天保8	金華山・松島図	東東洋筆	写実的な鳥瞰図ではないが、寺の下部にシカの群が描かれている	山形美術館蔵 <sup>50)</sup>

金華山におけるシカと人との関係

9	1851	嘉永4再刻	陸奥東海金華山正面図・靈山背面略図(木版)	大金寺	4頭(黒沢古寺地2, 大金寺奥古寺地2)	個人蔵
10	1865	元治2	陸奥東海金華山正面図・靈山背面略図(銅版)	女々堂緑山刀, 大金寺	4頭(黒沢古寺地2, 鹿山付近草地2)	Berkeley Library蔵, 郡山市立美術館蔵
11	1865	慶応元再刻	陸奥東海金華山正面図・靈山背面略図(木版)	大金寺	No.9と同内容	個人蔵
12	1865	慶応元再刻	陸前東海金華山正面図・靈山背面略図(木版)	大金寺	No.9と同内容	仙台市民図書館蔵, 個人蔵
13	1868	明治元	奥州金花山大金寺之図(木版)	勝川英斎	大金寺境内, 大杉の下などに3頭	仙台市博物館蔵, 本間美術館蔵
14	1883	明治16改刻	陸前東海金華山正面図(木版)	社務所	5頭(黒沢古寺地2, 大金寺奥古寺地2, 鹿山付近草地1)	個人蔵
15	1889	明治22	陸前国牡鹿郡金華山明細絵図(銅版)	社務所, 銅版	本図なし袋のみ(袋にシカ2頭)	市立米沢図書館蔵
16	1891	明治24	陸前国金華山縮圖(銅版)	古内龍之進 画作兼彫刻, 発行著者・引地松治	金椿社の前1頭	黄金山神社蔵 <sup>52)</sup>
17	1893	明治26.10	陸前国牡鹿郡金華山明細絵図(銅版)	黄金山神社社務所	No.16と同画	個人蔵
18	1893	明治26.3	陸前国金華山縮圖(銅版)	編輯・発行・今野謙三郎	No.16と同画	個人蔵
19	1894	明治27.2	陸前国金華山縮圖(銅版)	著作・発行・今野謙三郎	No.16と同画	国際日本文化研究センター蔵, 栃木県立文書館蔵, 個人蔵, Stanford Libraries蔵
20	1897	明治30再版	陸前国牡鹿郡金華山明細絵図(銅版)	黄金山神社社務所	No.16と同画	個人蔵
21	1898	明治31	陸前国金華山真景明細図(石版)	画作発行黄金山神社社務所	鹿山に5頭	Stanford Libraries蔵
22	1913	大正2	陸前国金華山真景明細図(石版)	社務所	No.21と同画	東北学院大学博物館蔵 <sup>53)</sup>
23	1933	昭和8	金華山景勝交通鳥瞰図(原画)	吉田初三郎	52頭(仁王崎3, 金波越奥3, 芍薬園2, 燈台手前4, 発電所奥5, 鶴ヶ岡公園8, 二ノ鳥居3, 五本松10, 旭岡公園14)	黄金山神社蔵 <sup>54)</sup> , 印刷物による確認のため頭数は概数

論文

24	1933	昭和8	金華山之図屏風	吉田初三郎	54頭（燈台手前5, 鶴ヶ岡公園6, 境内8, 五本松16, 旭岡公園19）	黄金山神社蔵 <sup>55)</sup> , 印刷物による確認のため頭数は概数
25	1933頃か	昭和8頃か	金華山名勝案内図	澤田文精社 印刷	19頭（仁王崎2, 発電所奥5, 鶴ヶ岡公園5, 五本松3, 旭岡公園4）	国際日本文化研究センター蔵

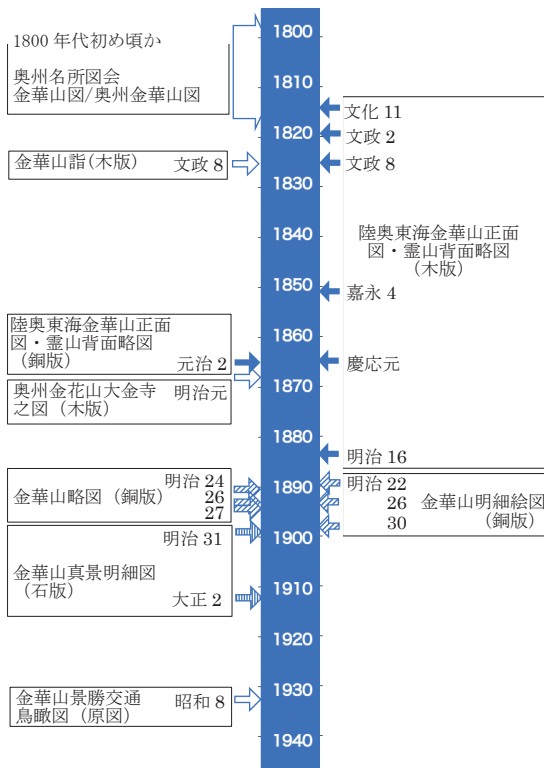


図2 近世近代の金華山を描いた鳥瞰的な絵図の見取図

時期的に早いと考えられる絵図から、シカの描かれ方を検討する。まず、『金華山図』（仙台市博物館蔵）、『奥州金華山図』（東京国立博物館蔵）がある。この2絵図の描写内容は酷似しており、共通の画を元に模写されたか、どちらかがどちらかを模写したかの関係にある<sup>57)</sup>。これらには背面（東側からの



図3 『奥州金華山図』でのシカの描かれ方

東京国立博物館, Image: TNM Image Archives

鳥瞰的な図)の図はなく、正面(西側)からだけの図となっている。これらの図の作成年は明らかではないが、描かれている本社の形態が一連の『正面・背面図』と異なっていることから、1813(文化10)年の火災の前の形態ではないかとの推定があり<sup>58)</sup>、また、『奥州金華山図』は「堀田文庫」の印があり、堀田正敦(1755-1832)の収集資料であることから、時期的には一連の『正面・背面図』が出版されはじめる時期かその前の時期に描かれた可能性が高い。『奥州金華山図』では、亀島前海岸、本社拝殿前、拝殿下の鳥居附近と、亀島の船着場から大金寺の境内に至る間を中心にシカが描かれている(図3)。紀行文での、1812(文化9)年『夢遊金華山之記』で、船着場から寺内までの間にシカが群れ居たという記述とシカの描かれている場所は合致している。1800年代はじめ頃には船着場から大金寺の境内までの間に人に馴れたシカがみられたことは紀行文と絵図の双方から裏付けられる。

## 論文

1814(文化11)年以降、金華山を西側上空の視点(正面)と東側上空の視点(背面)から鳥瞰的に描いた一連の『正面・背面図』が出版される。古い版とみられるものから、1814(文化11)年版, 1819(文政2)年再刻版, 1825(文政8)年再刻版, 1851(嘉永4)年再刻版, 1865(慶応元)年再刻版, 1865(慶応元)年再刻板修正版, 1883(明治16)年版が確認される。同内容の図の再刻が繰り返されたとみられる。1814(文化11)年版では、黒沢古寺地にシカ3頭, 大金寺奥の古寺地に2頭, 大金寺下の鹿山付近とみられる草地に2頭のシカが描かれているが, 1819(文政2)年再刻版, 1825(文政8)年再刻版では大金寺の境内にシカが3頭, 来訪者と対峙するような関係で描き加えられている(図4)。1851(嘉永4)年再刻版以降の印刷図では大金寺前のシカは明確には描かれてはいない。版木の摩耗によって不鮮明になっている可能性はあるが, 一連の『正面・背面図』ではシカと人との関係を特に強調して描こ



図4 『陸奥東海金華山正面図・靈山背面略図』(文政8年再刻成, 個人蔵)でのシカの描かれ方

うとする意図は感じられない。

1868(明治元)年作成とされる勝川英斎の『奥州金花山大金寺之図』は、大金寺境内でシカと人が近接し、餌を与える姿を描いている。明治期の金華山を描いた絵図としては、その後、1889(明治22)年から銅版の『陸前国牡鹿郡金華山明細絵図』が黄金山神社社務所から発行される。従来の木版画では、西側からの正面図と東側からの背面図がそれぞれ描かれていたが、この銅版画では正面図のみとし、背面図に描かれていた名跡などは周辺の囲みの中に個別で紹介する形に大きく変化している。これと同内容の銅版画が、1891(明治24)年に『陸前国金華山縮図』(発行著者引地松治)として発行される。これら2種類の図は基本的に同じ版で刷られたとみられるが、これらの銅版図では鹿山が描かれず、シカは神社境内の金樁社の前に1頭描かれているのみである(図5)。一連の『正面・背面図』でのシカの描き方と同様、シカと人との関係を強調する描き方ではなく、シカが島内に多くみられることもこれら銅版画からは読みとれなくなっている。一方で、図は袋入りで頒布、配布され、多様なデザインの袋が残されているが、その全てにではないがシカが



図5 『陸前国金華山縮図』(明治27年版)でのシカの描かれ方  
国際日本文化研究センター蔵



図6 『陸前国金華山縮図』(袋)  
(明治26年)で描かれるシカ、個人蔵

## 論文

大きく描かれるデザインもあり、金華山を代表するものとしてシカを強調して描く意識もあった(図6)。

1898(明治31)年には『陸前国金華山真景明細図』が社務所から発行される。彩色の石版で写実的な描写となり、鹿山にシカが5頭描かれ、現状に近い印象を受けるが、神社境内でシカと人が近接する関係は描かれていない。袋にはシカが7頭描かれており、絵図を手にする者にはシカが強く印象づけられる。1933(昭和8)年には吉田初三郎が金華山を訪れ<sup>59)</sup>、鳥瞰図を描いている。『金華山景勝交通鳥瞰図』(原図)では島内の多数の地点で合計50頭以上描かれ、実際にシカが多くみられる箇所では描かれていると考えられる。神社境内は、鳥居の下に描かれているがそれより内側では描かれておらず、この時期、境内にはシカは多く見られなかったのかもしれない。

## 4. 明治期以降の金華山のシカと人の関係

### (1) 紀行文、案内記での金華山のシカと人

明治期以降、第二次大戦終結までの金華山に関する紀行文、案内記等でシカについて記述しているものを表3にまとめた。50点あまりの文献があげられたが、紀行文での訪問年、案内記等の出版年をみると、図7のとおり

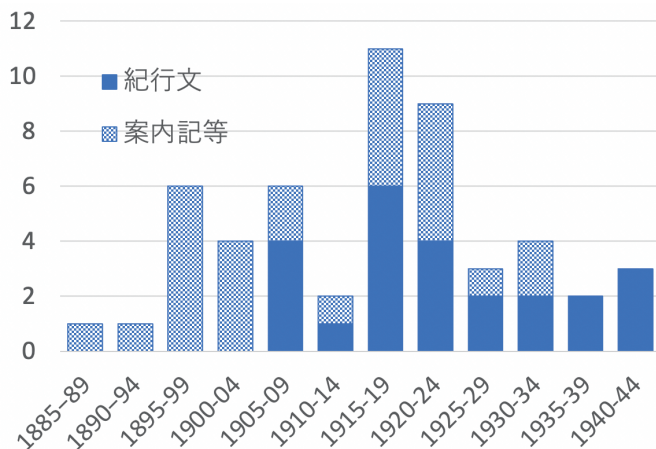


図7 明治期以降の金華山に関する紀行文、案内記等の出版数



1915～24(大正4～13)年の間の数が多い。大正期に入って紀行文、案内記類が増加することについては、2章でみた石巻への鉄道の開通と石巻から金華山への航路開設により、アクセスが向上したことと関係があるだろう。大正の後半には石巻からと塩釜からの航路が競合し、1925(大正14)年度に参詣者数が10万人に達するなど、関心が高まった時期であった。

明治期の終わりまでは紀行文はみられず、他の資料を参考に記された案内記類が多く出版されるが、明治末から大正期に、遅塚麗水、坪谷水哉、大町桂月、田山花袋、谷口梨花といった紀行文作家、案内記作者が訪れ、紀行文的な案内を残している(この時期のこれら作者の著作は図7の分類上は紀行文とした)。

金華山についての紀行文、案内記ではシカについてふれられているものが多いが、明治期の案内記類は、金華山のみを対象とした地元で出版された案

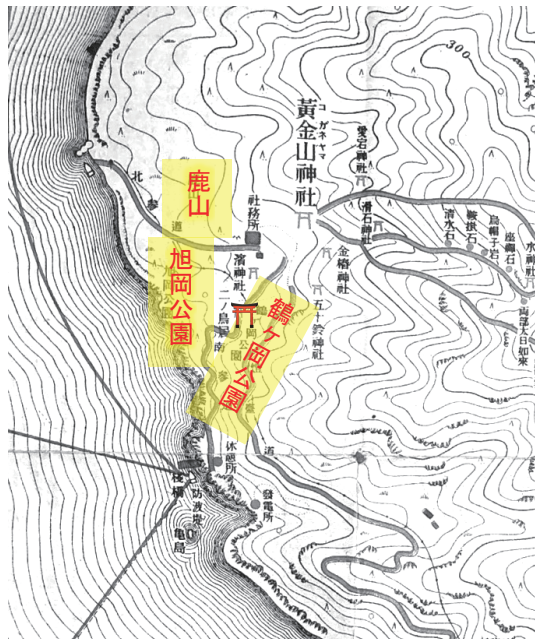


図8 黄金山神社周辺のシカがみられた箇所  
地図は黄金山神社社務所(1929)金華山参詣の葉より

## 論文

内記にわずかに詳細な記述がみられるが、それ以外では「山中麋鹿多く遊客至れば陸続出来りて食を求む宛も家畜の如し」(野崎ら1903)に典型的に見られるように、シカが多い、食を求める、家畜のようである、奈良のようである、といった内容を記すにとどまり、当時のシカと人との具体的な近接関係の検討資料としては有用性が低い。同様のステレオタイプのシカの表現は大正期の案内記でも散見される。

明治期の案内記としてシカと人の関係を具体的に記しているものとして1895(明治28)年の案内記『金華山小誌』(伊達万次郎編と田代善之助編の2種類がある)があり、「一の鳥居に到る其西北一帯を鹿山と云ふ織草芊綿山鹿群游人到れば食を乞ひ尾し来る賽者兼て山鳥より煎餅を購ひ来り與ふれば争そひて喰ふの状頗る愛すべし」(伊達編1895)と記され、人馴れしたシカがいる場所については鳥居手前にある草が青々としている「鹿山」である。人との関係は食物を欲しがって来て、餌を与えれば争って食べる状態で、餌は来訪者が対岸の山鳥で買ってきた煎餅である。

明治期の紀行文としては、1906(明治39)年に歌人長塚節が訪れ、1909(明治42)年に大町桂月が紀行文を残し、それ以外は俳人河東碧梧桐によるもの(河東1906)、雑誌投稿によるもの(瞰月生1908)が確認されるのみで多くはない。大正期に入ると、遅塚麗水、坪谷水哉、田山花袋がそれぞれ紀行文を残している。遅塚、坪谷、田山は明治30年代に全国の名勝案内を記しているが、ステレオタイプのシカの記述に終始しており、大正期に実際に金華山を訪れ、紀行的な案内記を残している。遅塚は1913(大正2)年に、坪谷は1914(大正3)年に金華山を訪れ、遅塚は山鳥から北参道の船着場に渡り、坪谷は汽船で沖に投錨し舳が迎えにきて、亀石の船着場から上陸している。田山は1917(大正6)年の『山水小記』に金華山の紀行を記し、汽船で塩釜から直接行かれるとしながら、坪谷と同じく山鳥から渡っている。なお、田山の紀行にはシカに関する記述はない。1919(大正8)年には鉄道省で『鉄道旅行案内記』などを執筆した谷口梨花が紀行を記し、また仙台鉄道局の小柴が1920(大正9)年に訪れ、観光政策の視点から紀行を記している。1923(大正12)年には仙台協賛会が東京の漫画家一行を松島、金華山などに招聘し、

画と紀行文での紹介を依頼し『松島金華山漫画の旅』としてまとめている。

これらの紀行文などから、明治期から第二次世界大戦終結時までのシカと人との関係を、人馴れしたシカがいる場所、食物を欲しがって来る状況、シカに与える餌、餌を入手した場所、シカの状況について奈良や宮島と比較しつつまとめる。人馴れしたシカがいる場所については、「鹿山」「鹿山公園」と明示したもの(中村1917、谷口1919、矢野1924、丹野1925、石田1926、松根1941)のほか、「青草萌え出る野」(瞰月生1908)、「青毛氈を布いた様な平地」(小柴1920)など、鹿山か鶴ヶ岡公園、旭岡公園(場所は図8を参照)のいずれかであろう。「[摂政宮殿下御展望御治定地]と大きな標柱の樹ててある所までゆくと鹿がぞろぞろ現はれた」(柳川1942)にある標注は鶴ヶ岡公園にあった。1925(大正14)年の摂政宮行啓にあわせ、現在の位置に、棧橋と防波堤が建設され港として固定されたが、それまでは北側の船着場(図8参照)と現棧橋付近から上陸し、水深も浅く、5トン未満の船舶が限度であったとされる<sup>60)</sup>。北参道の船着場から上陸した者は鹿山附近でシカを確認し、現棧橋付近の船着場からの者は鶴ヶ岡公園附近でシカを確認することとなった。「一带を鶴ヶ岡と謂ひ、一名【鹿山公園】と呼ぶ」(丹野1925)との記述もあり、鶴ヶ岡公園と鹿山は区別して認識していない場合もあり、シカのいる草地を「鹿山」と記している可能性はある。

人馴れしていないシカについての記述も見られ、「山蔭に居る鹿は能く馴れては居らぬと見えて屹度逃げて行く」(長塚1906)と、場所によっては馴れていないシカがいることも記述されている。

食物を欲しがって来る状況は、「何物が要求する如く一行目掛けて飛来る」(瞰月生1908)、「菓子や、ビスケットを遣れば、近づき来て掌で食ふ」(坪谷1914)という記述があり、食物を求めて来るが、まとわりついて困るという記述はない。一方、「土産を出して見せると五六尺の近くまで寄る。こちらから更に近づくとついと逃げる。投げてやればたべる。一行の旅装が黄色な桐油を掛けたり笠をかぶつたりして居るので気味が悪いのであらう」(長塚1906)、「白焼の煎餅を把りて試みに鹿を喚べば、洋服姿の異様の男の余等が群を、見るに慣れざる此の山姫の僕婢等は、愛らしき眼を睜りつつ凝立

## 論文

して馴近かず」(遅塚1913),「三々五々と鹿がやつて来る,然し御土産無しの手ぶらの御客には鹿も呆れたか余り纏綿らぬ」(小柴1920)と,餌を与えようとしてもなかなか近づいてこない状況も記述されている。

シカに与える餌については,「煎餅」(伊達編1895),「小さな煎餅の括ったもの」(長塚1906),「白焼の煎餅」(遅塚1913),「菓子やビスケット」(坪谷1914),「煎餅」(谷口1919),「芋煎餅」(小柴1920),「ビスケット」(柳川1942)と,煎餅が多いが,昭和期になるとビスケットがみられる。また,「物をやると何んでもムシヤムシヤ喰つてしまふ」(山田1923),「誰かが辨當の残りを投げてやつたら,澤庵も握り飯も,ムシヤムシヤと遠慮なく失敬して居た」(池辺1928)と,シカ用に準備された餌ではない食物を与える様子も記されている。

餌を入手した場所については,遅塚は役人らの歓待を受け,準備されていた煎餅を与え(遅塚1913),坪谷は菓子やビスケットを与えているが,「鹿の餌を売る人家が一軒もない」と記しており(坪谷1914),持参したものを与えたと考えられる。谷口は山鳥の渡で買ってきた「煎餅」を与えている(谷口1919)が,山鳥の茶店では十銭の「芋煎餅」を売っていたことが記されている(小柴1920)。1940年代に入ると,船着き場で一袋十銭のビスケットを押し売りされたと記され(柳川1942),島の船着き場で物を売る者が現れていたこと,山鳥の渡の茶屋とは違い,煎餅ではなくビスケットを売っていたことが確認される。江戸期には山鳥で握り飯をシカの餌用に売っていた記録があったが,明治期から大正期にかけては煎餅を販売していたようである。その後,船着き場での餌販売に態様が変化し,餌の内容も変化した可能性がある。馴れたシカは人が与える多様なものを食べる状況になっていた。

シカの状況について,奈良や宮島と比較した記述がみられる。「其斑紋の美しいことは奈良の鹿などの到底及ばぬ所である」(長塚1906),「奈良,厳島に棲める遊鹿の毛の色黝く穢れて體の羸瘦せるを見たる余等の眼には,此の山の鹿の毛の色緒くして潤澤あり,斑文の鮮かに皓くして明麗なるに驚異するなり,奈良,厳島の鹿の,僅かに雪花菜の團子に養はるるに反して,これは山果林菜,儘自然の境域に優游しをるが為めなるべし」(遅塚1913)「金

華山の鹿は毛皮美しく豹よりも美しい。奈良の鹿、宮島の鹿を見た眼には驚嘆に値する」(白鳥1935)と、奈良や宮島よりも斑紋が美しい、毛皮が美しいと記され、遅塚は奈良、宮島に比べ栄養状態がよいとし、食物の違いによると指摘している。「『何しろ、あそこの鹿は、奈良のやうに飼つて置くんぢやないからね』」(田山1922)といった記述もあり、遅塚のキラズの団子で養われるとの記述も含め、奈良や宮島のシカが人の与える餌によって飼養されているように理解されている。

人に馴れた状態について奈良や宮島のシカとの共通性を記すものとしては、「宮島に渡つた時と同じである」(白井ら1918)、「奈良の鹿の様に馴れて可愛らしい」(谷口1919)、「奈良と巖島を一所にしたかの観がある」(森島1923)との記述がある。共通性はありながら、奈良のシカよりも金華山のシカは人に馴れておらず野性味があると記すものも多い。「奈良や宮島の鹿より行儀がよいあの辺の鹿は客の袂や荷物に纏綿りついて実に五月蠅い」(小柴1920)、「奈良と違つて野生分の多い鹿」(中西1923)、「奈良あたり里の鹿ならぬ別誂へ山の鹿の生活を見た」(代田1923)、「金華山の鹿は、奈良のその様に、ブルジョアジーでもなければ、不良性もない」(日下部1931)、「総じて奈良の鹿ほど人には馴れてゐない」(1942柳川)などである。総じて金華山のシカについて好意的に記すものが多い。

防鹿柵や森林との関係にふれるものもみられる。「植林の苗木を鹿が喰ふ為め山に万里の長城の宜しくの長い長い柵を結び鹿入らしむ可からずと制札す」(小柴1920)、「鹿を入れぬ為の金網を越し」(日下部1931)などシカによる被害防止の構造物を記述している者もあり、「山林局では此の可憐の動物を害獣と目して寧ろ撲滅を主張する」(清水1923)、「冬期になると此鹿群は食物の不足から管林署の造林内に入り植樹を害すること甚しいので管林署では苦心してゐると云ふ話である、併し金華山を名勝の地たらしめ同山の一名物となつて来た歴史的因縁の浅からぬ又全国的に次第に減少の傾向ある日本鹿は同山の様な処で天然記念物として保護すべきである」(山本編1931)と、金華山のシカが造林事業との関係で問題となっている点を記したものもある。

## 論文

奈良でも、近世からシカによる農業被害防止、人身被害防止対策が講じられ、人との近接関係が維持されてきたが、金華山のシカによる国有林の造林木への被害は明治期からあり、営林署によって森林被害が生じないようにシカ侵入防止柵が設けられ、個体数管理の必要性が述べられている<sup>61)</sup>。大正期からシカの捕獲、追い込みが行われ、第二次大戦後には大量の捕獲が実施されるが、この経過とシカと人との関係への影響は稿を改めて検討したい。

表3 明治以降第二次世界大戦終結までの金華山の紀行文・案内記等に見るシカと人との関係 ※紀行文であって訪問年が明確なものは訪問年

	発行年 ※	著作名	著者、発行社/雑誌名	シカに関する記述内容
1	1886 明治19	陸奥廼名所 栞	久永連蔵 (春永)編, 益嶸堂	金華山へ着ぬ・・牡鹿牝鹿群り出て往来の人に馴て食物を乞ふこと飼置る犬の如し
2	1890 明治23	仙台案内	庄子輝光編	金華山に至れば則ち傍らの林鬱より数頭の麋鹿陸續出来りて人に馴るる家畜の如し人々之れに食物を与ふ
3	1895 明治28	金華山小誌	伊達万次郎 編, 正気堂	一の鳥居に到る其西北一帯を鹿山と云ふ織草芋綿山鹿群遊人 到れば食を乞ひ尾し来る養者兼て山鳥より煎餅を購ひ来り與 ふれば争そひて喰ふの状頗る愛すべし而して山中の鹿數凡そ 一千は下らずと云ふ 因に云ふ山中獸類鹿と猿の外産せず猿は数十群遊すれとお 多くは山奥に在り人に近つかず (挿絵あり: 鹿山で餌を与 えている図, 六一居士画)
4	1895 明治28	金華山小誌	田代善之助 編, 鮎川村	二の鳥居に到る其西北一帯を鹿山と云ふ織草芋綿山鹿群遊人 到れば食を乞ひ尾し来る養者兼て山鳥より煎餅を購ひ来り與 ふれば争ふて喰ふの状頗る愛すべし (挿絵あり: 伊達「金華 山小誌」と同じ)
5	1895 明治28	日本名勝地 誌 第五編	野崎城雄 編, 博文館	鳥に渡れば早く数頭の麋鹿林中より来り人に馴るること家畜 の如し
6	1897 明治30	仙台名勝案 内附塩釜松 島名所案内	菊田定郷 編, 宮城廻 菽社	参詣人金華山の入口に至れば傍の林鬱より数十頭の麋鹿圍集 して人に馴るること猶ほ家畜の如し人々之に食物を与ふ聞く 山中の鹿凡そ一千に下らずと
7	1897 明治30	日本の仙境	石川鴻齋, 桜華国(3)	山中鹿多く、人に忤(な)れて、相戯る
8	1898 明治31	日本名勝記 上巻	遅塚麗水, 春陽堂	麋鹿数十あり、宰殺するを禁ず、来往して甚だ人に親しむ
9	1899 明治32	日本漫遊要 覧 上の巻	藤野彦次郎 編, 東京画 報社	林中麋鹿あり、人に馴れて家畜の如し
10	1902 明治35	日本鉄道線 路案内記	桜井純一 編, 博文館	人々之れを渡り金華山に至れば、則ち傍らの林鬱より数十頭 の鹿出来りて、人に馴るる事家畜の如く、人の食物を与ふる を待つさま奈良の如し

金華山におけるシカと人との関係

11	1903 明治36	日本海陸漫遊の栞 東部	野崎城雄, 洲崎栄芳著, 六々会	山中麁鹿多く遊客至れば陸続出来りて食を求む宛も家畜の如し
12	1903 明治36	日本漫遊案内 上巻	坪谷善四郎編, 博文館	渡りて金華山に至れば傍らの林藪より数十頭の鹿続々と出来りて, 人に馴ること家畜の如く, 人の食物を与ふるを待つまも奈良春日の鹿に異らず
13	1905 明治38	金華山道志るべ	伊勢斎助編	優も人に馴れ来る鹿は餌を乞ふ事青丹よし奈良の里にことならず 陣取場: 頂上より東に下る高さ所あり伊達政宗公山鹿を逐ひたる時の休憩所なり
14	1906 明治39	日本新漫遊案内	田山花袋, 服部書店	人々之れを渡り金華山に至れば, 則ち傍らの林藪より数十頭の鹿出来りて, 人に馴るる事家畜の如く, 人の食物を与ふるを待つまも奈良の如し
15	1906 明治39	炭焼の娘	長塚節, 春陽堂 1915 発行	「鉛筆日鈔」(明治39年)八月三十一日 ▲山雉の渡し 茶店の前を行き過ぎようとする女房があとから呼びかけてお山へ登るなら草鞋を買って鹿の土産を持つて行けといった。(中略)鹿の土産といふのは小さな煎餅の括つたのである。(中略)道者は口々に鹿々と呼んだら思はぬ糸薄の中から大きな角が動いて鹿が五六匹あらはれた。土産を出して見せると五六尺の近くまで寄る。こちらから更に近づくとついで逃げる。投げてやればたべる。一行の旅装が黄色な桐油を掛けたり笠をかぶつたりして居るので気味が悪いのであらう。鹿が煎餅をたべる所を道者が三四人で手と手をつないで鹿を坂の下へ追いつめようとしたが、鹿は軽く飛び退いてけろつと立つて居る。よく見ると鹿は糸薄の中にそこにもここにもけろつとして立つて居る。其斑紋の美しいことは奈良の鹿などの到底及ばぬ所である。(中略) 雨はしとしととして深更までやまぬ。厠へ立つたら目の前をひらりと飛ぶものがあつた。驚いて見ると鹿である。手を出したら鹿は指のさきへ鼻づらをこすりつけた。 九月一日 ▲鹿の糞 霧の吹きつけるなかを山蔭へおりる。やつぱり樹木が深くて坂が急である。(中略)又誰か後の方で鹿々と嗷怒鳴つた。あれあれと一人が指して居る方を見た。其時はビオウと鳴いた声ばかりで鹿は見えなかつた。(中略)山蔭に居る鹿は能く馴れては居らぬと見えて屹度逃げて行く。一つか二つか離れて居るのがひよつこり人を見ると非常に狼狽して草村を跳ねて逃げて行く。糸のやうな脚で跳ねるのがふわふわとして綿の上でも跳ねるかと思ふ様に見えて如何にも軽げである。驚いて逃げる時にビオウと細い声で鳴き捨てるのである。五六匹も揃つて居るといふと体と体と押し合ふ様にして或距離の所まで行くところとして何時までもこちらを見送つて居る。無邪気なものである。「鹿の尻はモツコ禪をはめた様だなシ」といふ声が又後の方から聞えた。大箱の岬といふ札の立つ所へ出た。(中略)青芝は地にひつついた様で綺麗である。鹿が此芝をくひに来ることがあると見えて豆粒のやうな鹿の糞がころころと転がつて居る。
16	1906 明治39	所在片信	河東碧梧桐, 懸葵 3(11), 1910	金華山は予期した程奇な山でもなかつた。よく見通しの谷の果もない中に紅葉の鮮やかに散り残つてをるのを見下ろした時、猿の群をなして行き、鹿の蹄を蹴つて飛ぶに遭遇して、ただ深山幽谷の感じが起つた。(十一月二十日、陸前荻の浜にて)

論文

17	1908 明治41	金華山紀行 2	瞰月生, 六 大新報11 月8日付	径路を登る十余間にして青草萌え出る野に達せり, 宛然春日野を連想される無数の鹿は一行を歓迎して, 鼻をクフクフ動めかして何物か要求する如く一行目掛けて飛来る生憎与ふべき一片も持たぬ
18	1909 明治42	山水めぐり	大町桂月, 博文館, 1919発行 (['大町桂 月全集2'] 1926に著 述年の記載 あり)	「金華山」上陸すれば, 山鹿角をふりたてて, 人を迎ふ。(中略) 峯又峰を上下するに, 一鳥鳴かずして, 山更に幽なるを覚ゆ。巖石のにはかに動くかと見れば, 臥したりし鹿の, わが蹻音を聞きてにげゆくなり。(中略) 燈台と黄金祠との外には, 農家もなく, 漁家もなく, 住む人よりも猿多く, 鹿多し。
19	1911 明治44	石巻案内	高橋長三郎 編, 高長書 店	数十の麋鹿は, 早く林叢中より寄り集ひて詣者を迎へ, 人を怖れざること家畜の如く, 餌を求むる様真に畫中のものたり。
20	1913 大正2	松島と金華 山(五)	無冠人, 東 京朝日新聞 10月5日付 け	・・僅に通ずる崖伝ひの細径より登り, 朱の鳥居の辺より芝生の山となり松並木のところどころなる辺に鹿の人待顔なるも絵の如し, 猶も歩を拾ふには道は左に折れて巨木の間に入り,
21	1913 大正2	旅かゞみ: 紀行文集	遅塚麗水, 磯部甲陽 堂, 1915 発行	「松島と金華山」 祠人, 村の長, 郡の長等に迎へられて山に上れば, 芊綿たる芝草の青く烟り, 梢は雲を払ふばかりの老松や千歳の苔の衣つけたる巖など, 自からなる妙畫の意に布置せられ, 其蔭に鹿や小麋の悠々として遊ぶあり, 人遠く世迢に, 恍として古への蓬萊瀛洲のさまを憶ふなり, 村の人の顔くくれたる白焼の煎餅を把りて試みに鹿を喚べば, 洋服姿の異様の男の余等が群を, 見るに慣れざる此の山姫の奴婢等は, 愛らしき眼を睜りつつ凝立して馴近かず, 奈良, 厳島に棲める遊鹿の毛の色黝く穢れて體の羸瘦せるを見たる余等の眼には, 此の山の鹿の毛の色緒くして潤澤あり, 斑文の鮮かに暗くして明麗なるに驚異するなり, 奈良, 厳島の鹿の, 僅かに雪花菜の園子に養はるるに反して, これは山果林菜, 儘自然の境域に優遊しをるが為めなるべし。
22	1914 大正3	東西南北	坪谷水哉, 博文館, 1915発行	「金華山巡り」 ・・先刻船中に見た木造の大華表を潜るとき, 路上にはチヨコレートに似たる黒く圓い物が, 其所此所に落ち散て居る。熟視すれば其れは皆な鹿の糞だ。成る程路の左右には, 樹下にも草間にも数十の鹿が居る。角のあるもの, 無いもの, 孕んで腹の垂れ落ち相なものなど, 何れも人に慣れて, 菓子や, ビスケツトを遣れば, 近づき来て掌で食ふ。が, 此所には奈良や厳島の様に, 鹿の餌を売る人家が一軒も無い。 ・・早々に辞し去て山腹の華表を潜るとき, 数十の鹿は, 臥しながら頸を挙げて見送つて居る。(「神鹿」「金華山の神鹿」として写真2枚あり)
23	1915 大正4	ポケット宮 城県誌	及川忠輝, 奥羽出版社	金華山に至れば, 則ち傍の林巒より数十頭の鹿出で来りて, 人に馴ること家畜の如く, 人の食物を与ふるを待つさま恰も奈良の夫れの如し
24	1917 大正6	松島と金華 山	中村古峡, 古峡社	渡船を捨てて, 細い崖路を暫く行くと, 綺麗に草の生えた丘の上に出る。其処に二の鳥居が立つてゐる。左手に奈良の若草山のやうな青巒が横はる。之が即ち金華山名所の一つなる鹿山で, これも金華山名物の牡鹿牝鹿が, 其の麓からぞろぞろと並んで来る。
25	1917 大正6	五色筆	岡本綺堂, 南人社	金華山の一夜: 鹿の声が遠く聞えた



金華山におけるシカと人との関係

26	1917 大正6	山水小記	田山花袋, 富田文陽堂	金華山について1頁くらい記しているがシカの記述なし
27	1918 大正7	全国遊療地名勝古蹟案内	地理旅行案内社編, 日本書院	殊に数十頭の鹿の人に馴れて餌を求めるさまは奈良春日を思はせるものがある。
28	1918 大正7	大日本名勝史蹟	高木斐川, 原坦續編, 公益通信社	渡りて金華山に至れば古歌に「宮城野の荻や小鹿の妻ならん」と詠みたる如く、多くの鹿、逍遙し、人を見るや、傍の林叢より数千頭続々として出で来り、恰も家畜の如く、人の食物を与ふるを待つ様、奈良春日の鹿と異らず
29	1918 大正7	趣味の地理、第1編(日本の山水美)	白井規一, 島田牛稚, 博文館	「金華山」 其処には沢山鹿が遊んで居て、人なつかしげに近寄つて来る。丁度宮島に渡つた時と同じである。
30	1919 大正8	石巻案内	高橋鉄牛, 石巻経済協会	「金華山」 群鹿の林叢中より寄り集ひて詣者を迎送し、人を怖れざること家畜の如く、或は又猿猴の樹間に飛交ふるありて、實に塵外の仙境なりとす
31	1919 大正8	汽車の窓から、東北部	谷口梨花, 博文館	「黄金花咲く金華山へ」 細い崖路を行くと綺麗に草の生えた丘の上に出る。左手に見ゆる山は鹿山で、牡鹿牝鹿の幾連が人の姿を見るとぞろぞろとやつて来る、奈良の鹿の様に馴れて可愛らしい。私は山鳥の渡で買つて来た煎餅を鹿にやつて暫く舟中の苦を忘れた、
32	1920 大正9	金華山紀行	小柴卯之七(仙台鉄道局旅客掛長)	・・加ふるに麋鹿三百頭此間に悠遊自適し野猿數百啼泣飛来す、斯んな美しい山斯んな清らかな地斯んな変化の多い所は俗塵の此の世にあるかと思はする詐と思ふなら乞ふ一遊あれ仙境は四時(といふても冬は疑問だが)門を開き麋鹿を渡口迄迎に出して待て居る、 鹿への御土産を買はふと思つて十銭の芋煎餅を二色買はうとして五十銭札を出したら釣銭がないとのことで買はなかつた、(中略)登り行くと間もなく広々した青毛氈を布いた様な平地へ出た、迎ひの人こそ来ぬが三々五々と鹿がやつて来る、然し御土産無しの手ぶらの御客には鹿も呆れたか余り纏綿らぬ、奈良や宮島の鹿より行儀がよいあの辺の鹿は客の袂や荷物に纏綿りついて実に五月蠅い、此方が鹿が行儀よいのか参詣客に手ぶらなのが多い為鹿が気が諦めて居るのか一寸疑問だが山鳥の茶屋が気が利いてれば確に鹿も相当の思慮を蒙ることと思ふ、 山には松、杉、柏、椎、栗、榎、山樺等何れも千歳古きを保つ、然し近来林区署にて払下伐木を為し尚植林をするそうで、其又植林の苗木を鹿が喰ふ為め山に万里の長城の宜しくの長い長い柵を結び鹿入らしむ可からずと制札す、仙境には「チト」相応しからぬ処置である。
33	1921 大正10	仙台及松島案内	熊谷恒一編, 東北印刷	「金華山」 山鹿あり群をなして来たり人に近いて食を求むる等真に塵外の仙境たるを覚ふべし

論文

34	1921	古社寺めぐり：美術行脚	斎藤隆三、博文館	<p>「金華山」 山雉の渡十八町を小船に渡りて鹿や猿の遊ぶ金華山に詣でたのは、(中略)草や荆棘の繁みから出てて溪澗を奔る幾十の大鹿の群れ、樹から樹へ、岩から岩へと飛び廻はる数百の猿猴の群れ、</p> <p>(中略)山谷溪流の間を縦横に奔馳して居る野鹿、其れ等の活きた光景に接しやうとならば、更に神社の所在地から一里半を東南に、燈台のある所まで行かねばならぬ、</p> <p>(中略)金華山の面白いことは、総じてが神秘的であること、自然に近い大森林のあること、猿と鹿と鳥の群れを見得ること、而して本土を照らす第一の日に浴するの至幸を得ること等であらねばならぬ。</p>
35	1921 大正10	仙台商工案内	寺本静編	<p>「金華山」 山中は猿猴多く樹間に飛び交ひ又山鹿あり群をなして来たり人に近いて食を求むる等眞に塵外の仙境たるを覚ふべし</p>
36	1922 大正11	温泉周遊、東の巻	田山花袋他著、金星堂	<p>『鹿は沢山あるの?』</p> <p>『何しろ、あそこの鹿は、奈良のやうに飼つて置くんぢやないからね』</p> <p>『鹿はおとなしい動物だからね。のそつとしてゐるよ』</p> <p>『沢山あるの?』</p> <p>『今ではもう少くなつたんださうだけれども、それでも、沢山ゐるよ。鳥につくと、そこにも此処にもつていふ風だよ』</p>
37	1923 大正12	療養遊覧山へ海へ温泉へ	松川二郎著、日本書院	<p>「金華山」 黄金山神社の神鹿が短い緑草の上をのこのこと歩いてゐるのも、塵外別天地の感を深うしてゐる。</p>
38	1923 大正12	関東奥羽名勝案内	黒岩芳泉、雄文館	<p>「神鹿遊ぶ金華山」 野生の猿、鹿などの悠々として遊べるなど、トテモ他に於て見るべからざる奇観である、(中略)船より上ると人なつこい鹿の群が遊んで居る、</p>
39	1923 大正12	松島金華山漫画の旅	仙台協賛会編、東北印刷出版部	<p>「松島から金華山へ」(池辺鈞・前川千帆)・・・放し養ひの鹿が、人なつこく、すり寄つて来る</p> <p>「塩釜から金華山へ」(中西立頃)・・・沢山な鹿は一行を不思議に迎へた。奈良と違つて野生分の多い鹿は、この山の気分が充分に現れてゐる</p> <p>「蜂に螫る記」(山田みのる)・・・鹿の群が夏草の上をゴロゴロやつて来る。物をやると何んでもムシヤムシヤ喰つてしまふ。奥山には五六百の猿が蕃殖して居ると云ふ。(鹿に餌をやる人の絵あり)</p> <p>「東北漫画順礼」(幸内純一)・・・金華山上陸。鹿が居る、鳥居がある、(鹿を写す人を描いた絵あり)</p> <p>「東北の涼味」(小林克己)・・・天然の鹿が六百、猿も居れば芍薬も自然の儘に咲いて居る (草を食べる鹿の絵あり)</p> <p>「仙松の印象」(在田稠)・・・鹿は忘れ得ぬ親しみを我々に与へた</p> <p>「松島から仙台」(宮尾良男)・・・山は禁猟地として鹿や猿木鼠の類が数多く鹿の馴れたのは里に出て人に餌を求める</p> <p>「松島漫画めぐり」(下川凹天)・・・鹿が海辺へ遊びに来て珍客をイチイチ鼻でかきかぎ迎へる。</p> <p>「金華山見物」(代田取一)・・・一応縁起の一節を借用して鳥の大畧を説明する『(中略)殊に目新らしきは猿、鹿の数十、群を為して遊息すること是なり、猿は敢て人に近かずと雖も鹿は能く人に馴る、是れ藩制の昔より今に至るまで禁猟の地なれば斯くは蕃殖せしならん』とある</p>

金華山におけるシカと人との関係

				<p>(中略)『鹿の背に鳥の留りけり青嵐』とでも一句参らうか、詩に曰ふ呦々たる鹿の鳴く音も具に聞いた、真に大自然の中に解放され、奈良あたり里の鹿ならぬ別誂へ山の鹿の生活を見た。(鹿の背に鳥が乗る絵あり)</p> <p>「漫画奥の旅」(穴戸左行)・・・上陸すると、人馴れた鹿共の群が、集まつてくる。何れもよく肥え太つて、斑紋が鮮だ。(鹿を写す人を描いた絵あり)</p> <p>「漫画の旅」(清水對岳坊)・・・斑点の美しい鹿は人馴れて、奈良の鹿の如く集まつて来る。全島に概算五百頭みるとか、然し山林局では此の可憐の動物を害獣と目して寧ろ撲滅を主張する、それは植林の若木の枝葉を害するからだ、役人氣質を笑ふよりも、吾等は鹿の為に一掬の涙を注ぐ</p> <p>「東北路ところどころ」(森島直造)・・・海岸近くの芝生、其処に遊ぶ鹿の群、奈良と厳島を一所にしたかの観がある、(草地の鹿の絵あり)</p> <p>「夏の東北めぐり」(森火山)・・・登ると柴が生へて綺麗な山だ、鹿が歩いてゐるのは面白い、(草地に佇む鹿の絵あり)</p>
40	1924 大正13	金華山(其一)	矢野俊孝、 日本公論12 (12)	<p>船を捨て、岩壁の危橋を攀づれば四辺の景は歩一歩と鮮かに、数十歩の後、左方に奈良の若草山に髣髴たる丘が現はれる、これは名所の一である鹿山で、野生の鹿群、物珍らしげに並んで来て、餌を乞ふ様も可憐である、同じ鹿でも奈良とは異つて、人を突く癖のあるのもめて危険である、</p>
41	1925 大正14	松島、金華山、平泉めぐり	丹野寅之助、東北印刷出版部	<p>・・・一帯を鶴ヶ岡と謂ひ、一名【鹿山公園】と呼ぶ。金華山名所の一つである。若木の櫻数本繁り其の葉がぐれにまたは樹の間から【牡鹿牝鹿】が群を成して迎へに來り人に良く馴れる。全山に約五百頭(奈良の春日には七百頭、安芸の宮島には一百頭との事)野性を帯びた純然たる華鹿科に属するもの。</p>
42	1926 大正15	金華山詣	石田靖一、 『石田靖一集』鉄道研究社	<p>四月十八日 途中に鹿山公園があつて、放たれた鹿が沢山遊んでゐる。人に馴れて近づいてくる。</p>
43	1929頃 昭和4	凸凹放送局：池部鈞集	池辺鈞、現代ユウモア全集刊行会	<p>「金華山行」直ぐに切り開かれて居る崖の小道を、ヨジ上る・・・上り切ると、緩やかな斜面は一帯の芝原だ・・・突然鹿だ鹿だと誰かが怒鳴った。成る程、七八正の鹿が耳を立てて、コッチを眺めてゐる。右の叢がガサッと音がしたかと思つたら、鹿の子が首を出した、ソラ向ふにも居る、アスコの木の下にも居ると云ふ騒ぎだ人間の騒ぎ様が烈しいので鹿の先生はあきれて居る、金華山の鹿は有名で東京から聞き及んだ所は確か日比谷公園にも、此處の鹿が居た筈だ。誰かが辨當の残りを投げてやつたら、澤庵も握り飯も、ムシヤムシヤと遠慮なく失敬して居た、丁度奈良公園の鹿と同様、如何にも人馴れたものである。一行は鹿と別れて、又上る。間もなく、山腹の黄金山神社社務所に着いた。</p>
44	1930 昭和5	金華山紀行	鈴木信治、 旅7(4)	<p>鹿、はしりて物をこふ。(中略)神の心に通ずる神苑に、心なく群れ遊ぶ鹿の子の可憐さはまた一しほであつた。</p>
45	1931 昭和6	金華山遊記	日下部昌勝、旅8(5)	<p>ポーツ！ と船の汽笛が海面を渡つて消えて行くとそれを合図の様に小陰から鹿の群が、豆粒の様にバラバラと弾き出されて来る、金華山の鹿は、奈良のそのの様に、ブルジョアジーでもなければ、不良性もない。</p> <p>右手はるか下、断崖の上に燈台がある。此処迄行こうと云ふ人は流石に少い、・・・鹿を入れぬ為の金網を越し、道なき急坂を汗と共に下り漸く絶壁の上に出る</p>

## 論文

46	1931 昭和6	金華山小誌	黄金山神社 社務所	鹿は内地産にて花鹿科に属す、古来神鹿と称し奈良、厳島と共に全国的に併せ称せらる、曾て北海道大学教授理学博士八田三郎氏、天然記念物調査委員として当山に来ること再三、真の野性的可愛を賞し其蕃殖と保護とに関し周到なる注意あり、且つ特に鹿の分譲を拒みて曰く、(中略)鹿島神社勧請の境内には必ず神鹿ありて蕃殖す、この縁由関係なき神社に分譲する如きは無意義なり、況むや観賞的分譲に於ておやと、(中略)博士又曰く、奈良の鹿は頭数約七百頭餘、金華山は四百頭餘、厳島は百頭内外なりと
47	1931 昭和6	宮城県名勝 地誌	山本金次郎 編、宮城県 教育会	金華山の日本鹿 金華山に船が着き鹿山公園に上ると、老若牝牡の鹿群が御土産のパン菓子を与へられるる習慣からぞろぞろ集つて来る柔和な可愛い獣である。(中略)現在金華山の日本鹿の頭数は明ではないが三四百頭は居るだらうとの話である、冬期になると此鹿群は食物の不足から管林署の造林内に入り植樹を害すること甚しいので管林署では苦心してゐると云ふ話である、併し金華山を名勝の地たらしめ同山の一名物となつて来た歴史的因縁の浅からぬ又全国的に次第に減少の傾向ある日本鹿は同山の様な處で天然記念物として保護すべきである。
48	1935 昭和10	詩心旅情記	白鳥省吾、 東宛書房	金華山の航路は幼少から難航ときいてゐるので、船にあまり強くない私は、同島の生れでありながら、恐れをなしてまだ一度も行つたことが無かった。 溪間に猿遊び、人に馴れざる鹿が軽快にあそんでゐる。金華山の鹿は毛皮美しく豹よりも美しい。奈良の鹿、宮島の鹿を見た眼には驚嘆に値する。
49	1936 昭和11	のっぺい汁	牟田高惇	「金華山行」(五合目あたりまで登ると)・・・丸太を並べた梯子を登り降りする所があった。そこから上へ鹿をあがらせない為にしたものかもしれない。
50	1941 昭和16	黛	松根東洋 城、秩父書 房	・・・磯からすぐ山へ登る。三丁許り行くと二の鳥居、その邊草山庭園の如く沢山の鹿が遊びに出てゐる、鹿山といふ。
51	1942 昭和17	昨日の影： 随筆	柳川十郎、 書物展望社	「金華山」・・・「摂政宮殿下御展望御定地」(側面に大正十四年行啓の御予定であつたのを、御取止めとなり甘露寺伯を御遣しに相成りたる旨を記されてゐる)と大きな標柱の樹てである所までゆくとき鹿がぞろぞろ現はれた。数へてみると、角のあるのと無いのとめて十五頭。今しがた船つき場で押売りされた、一袋十銭のビスケットを投げてやる。全島には何百頭といふほど随分たくさんゐるさうだが、総じて奈良の鹿ほど人には馴れてゐない。中には頭を心もち下げるやうにしながらやつて来て、角でひつかける素振りをするのがゐるし、また、ち一つと見詰めてゐて、こちらがビスケット片手に近づくと急に遽で逃げ出すものもある。
52	1942 昭和17	金華山詣で	倉本彦五 郎、風景9 (6)	棧橋から参道を上つて行くと、角の生ひ初めた神鹿が三々五々樹下に徘徊して居り、人懐し近づいて来る長閑さに、幾分船酔したような人々も直に恢復し慰められる。

## 5. まとめ

金華山でのシカと人の関係は、近世の1700年代の後半には、人が餌を与え、人に馴れる関係が船着場から大金寺境内までの間で成立していたこと

が、紀行文と絵図類で確認された。明治大正期、第二次大戦終結前までは多くの紀行文から、北参道の船着場と亀島の船着場(現棧橋付近)から神社境内にいたる間でシカと人との餌を介した近接関係が継続していたことが確認された。紀行文からは、金華山でのシカと人との近接関係はおおむね好意的に受け止められており、そのことも近接関係が継続した背景と言えるだろう。

シカと人との近接関係を観光対象として利用していたかについては、近世の絵図類では、シカとの近接関係を強調して描いているものは少ない。明治大正期には、絵図類の袋にシカが描かれることで金華山でのシカの代表性を強調する意識はみられるが、餌の販売は対岸の山鳥で煎餅が売られていた記録があるだけで、石巻、塩釜からの直行便の場合には入手できなかったであろう。島内の船着場で餌を買った記録は昭和に入ってからのものであり、1925(大正14)年の棧橋改修と船着場の一元化以降、島内での営業が進められ、観光対象としての利用が進んだとみられるが、案内記類では餌やりについてふれておらず、シカと人の近接関係を積極的に観光利用する意図は感じられない。

島内のシカと人が接する場所では、多様な食べ物を与えるようになるが、その行為を管理すべきという論調はみられない。シカに関する金華山島での課題として森林への影響があげられるが、第二次世界大戦終結までの時点では、森林被害対応によってシカと人との近接関係が影響をうけている状況は確認できない。今後、第二次世界大戦後の時期も含め、造林被害、森林への影響の観点からのシカの個体数管理への対応と、それに伴うシカと人との近接関係の変化を明らかにしたい。

## 謝辞

本研究の調査にあたっては、金華山黄金山神社、宮城県図書館、仙台市博物館、仙台市図書館、市立米沢図書館、東京国立博物館、国立国会図書館、東京都立中央図書館、埼玉県文書館、群馬県立文書館、栃木県立文書館、中村宏氏、南正人博士のご協力、ご助言をいただきました。深く感謝を申し上げます。また、本研究はJSPS科研費20K12404の助成を受けたものです。

【補注・参考文献】

本稿では、資料名や資料の引用に際して、旧字体は新字体とした。

- 1) 小島望 (2016) 餌付けによる野生動物への影響 (小島望・高橋満彦編著『野生動物の餌付け問題』, 地人書館, pp.3-17)
- 2) 水野憲一 (1985) 餌づけの功罪, 動物と自然 15 (14), 2-6
- 3) 三戸幸久 (1998) 野猿公苑: その問題点と再生, ワイルドライフ・フォーラム 3 (4), 155-157
- 4) 水野憲一 (1985) 前掲 2)
- 5) 在来家畜研究会編 (2009) 『アジアの在来家畜』, 名古屋大学出版会, 16
- 6) 小島望 (2016) 野生動物と人間社会との軋轢の解決に向けて (小島望・高橋満彦編著『野生動物の餌付け問題』, 地人書館, 279-305)
- 7) 小島望 (2016) 前掲 1)
- 8) 石田戢 (2013) 展示動物 (石田戢, 濱野佐代子, 花園誠, 瀬戸口明久著 (2013) 『日本の動物観: 人と動物の関係史』 東京大学出版会, 189-248)
- 9) 矢野智司 (2000) 『自己変容という物語 生成・贈与・教育』 金子書房, 160
- 10) 奈良県 (2022) 天然記念物「奈良のシカ」保護計画
- 11) 平侑子・水谷知生 (2018) 江戸中後期における旅人と奈良の鹿との関係～道中日記に見る宗教性と娯楽～, 動物観研究 23, 3-12
- 12) 奈良県史編集委員会編 (1990) 奈良県史 第2巻, 名著出版, 18
- 13) 東城義則 (2015) 都市公園とその周辺における野生動物群の行動管理－奈良公園における鹿寄せの成立－, 京都民俗 33, 89-107
- 14) 廿日市市 (2009) 宮島地域シカ保護管理計画
- 15) 水谷知生・平侑子 (2023) 近世以降の宮島のシカと人との関係－野生生物観光の観点から－, 観光研究 35 (1), 35-52
- 16) 小野寺正人 (1977) 金華山信仰の展開 (月光善弘編 (1977) 『東北霊山と修験道』 名著出版, 170-185)
- 17) 奥海登和子 (1975) 金華山信仰 (岩崎敏夫編 (1975) 『東北民俗資料集 4』 万葉堂書店, 141-161)
- 18) 牡鹿町誌編さん委員会編 (2002) 『牡鹿町誌下巻』 牡鹿町, 360
- 19) 上野から北へ鉄道を建設していた日本鉄道東北線 (現在の東北本線) が 1887 (明治 20) 年に郡山から塩釜まで延伸した
- 20) 1912 (大正元) 年 10 月に小牛田－石巻間に仙北軽便鉄道線 (現在の石巻線) が開通, その後 1919 年 (大正 8 年) に日本鉄道に買収され, 国有化された
- 21) 牡鹿町誌編さん委員会編 (2002) 前掲 18), 366-367
- 22) 牡鹿町誌編さん委員会編 (2002) 前掲 18), 343
- 23) 青森営林局計画課編 (1967) 『金華山地区国有林野観光資源開発調査報告書』, 6
- 24) 宮城県 『宮城県観光統計概要』

- <https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/kankou/statistical.html> (2023年4月3日最終閲覧)
- 25) 金華山黄金山神社 (1989) 『霊島金華山』 金華山黄金山神社社務所, 41-53, 阿部真幸 (1999) 金華山のシカと黄金山神社, 『金華山島の保護管理』 宮城県, 4-9
  - 26) 水谷知生・平侑子 (2018) 近世奈良の鹿研究における道中日記の有用性, 奈良県立大学研究季報 29 (2), 19-51
  - 27) 確認した道中日記について出発年, タイトル, 出発地 (現県名), 所蔵・出典の順に示すと以下のとおり  
 1805 文化2, 坂東道中日記, 埼玉, 加須市 (1986) 『加須市史続資料編』 加須市  
 1824 文政7, 奥州道中記, 千葉, 流山市教育委員会編 (1974) 『流山市史料集5』 流山市教育委員会  
 1845 弘化2, 奥州仙臺金花山道中記, 山形, 第六研究室 (2014) 史料翻刻「奥州仙臺金花山道中記」(日本史学科所蔵), 米沢史学 30, 179-180  
 1854 嘉永7, 湯殿山道中記写, 埼玉, 埼玉県立文書館蔵  
 1855 安政2, 越後出羽奥州道中日記帳, 埼玉, 埼玉県立文書館蔵  
 1862 文久2, 金花山道中宿帳, 千葉, 九十九里町誌編輯委員会 (1978) 『九十九里町誌資料集第九輯』 九十九里町  
 1865 慶応元, 湯殿山道中記, 埼玉, 埼玉県立文書館蔵  
 1865 慶応元, 越後出羽奥州道中記, 群馬, 群馬県立文書館蔵
  - 28) 天野桃隣編, 初山庭後校訂 (1916) 『陸奥千鳥』 (大正校訂俳諧名著文庫第7編), 俳書堂, 73-74
  - 29) 菅原雪枝編 (2001) 『仙台領の地誌: 奥州名所図会卷之五, 金華山紀行, 奥州仙台領遠見記, 奥州里諺集』, 今野印刷, 93-97
  - 30) 日本随筆大成編輯部編 (1974) 『日本随筆大成第2期12』 吉川弘文館, 58-59, 金華山訪問時期は不明だが, 東国巡遊に出たとされる1758(宝暦8)以降, 亡くなる1794(寛政6)年までの間の記録
  - 31) 高知地方史研究会編 (1968) 『土佐群書集成第14巻』 高知市立市民図書館, 99
  - 32) 南部叢書刊行会編, 太田孝太郎校訂 (1927) 『南部叢書第六冊』 南部叢書刊行会, 496-497
  - 33) 橋南谿著・境野正注 (1911) 『東遊記』 学海指針社, 26-31. 橋南谿『東遊記』には金華山についての記述があるが, 佐久間 (1971) によれば, 金華山の項目は百井塘雨『笈埃隨筆』をほぼ引用している (佐久間正円 (1971) 『橋南谿』 橋南谿伝記刊行会, 178-188)
  - 34) 菅原雪枝編 (2001) 前掲 29), 77-79
  - 35) 鈴木省三編 (1923) 『仙台叢書第三巻』 仙台叢書刊行会, 473, 478

## 論文

- 36) 宮本常一編 (1969) 『日本庶民生活史料集成 第2巻』 三一書房, 166-167
- 37) 斎藤武 (2014) 「松島日記」を読む, 置賜文化 108, 2-19
- 38) 佐伯有義編 (1908) 『神祇全書第4輯』 皇典講究所, 680
- 39) アチツクミュージアム (1938) 『復刻奥のしをり』 アチツクミュージアム, 5-6
- 40) 国立歴史民俗博物館蔵
- 41) 渡辺信夫編 (1983) 『宮城の研究第5巻 (近世編3)』 清文堂出版, 329
- 42) 山形市史編集委員会 (1975) 『山形市史資料第38号』 山形市, 61
- 43) 森銑三他編 (1979) 『隨筆百花苑 第13巻』 中央公論社, 275-276
- 44) 伊能穎則による金華山の紀行文は, 作成年が不明である。伊能は1806 (文化3) 年生, 1877 (明治10) 年没であり幕末期の紀行とした。金華山黄金山神社社務所 (1994) では『裏廻り遊記』とされているが, 1887 (明治20) 年の大八州学会雑誌 (16), 48-50 の「文苑」という欄に「下絵伊能穎則故人」による「金華山記」として掲載されている。死後10年経過した時期に雑誌に掲載された理由は不明であるが, このタイトルを用いた
- 45) 佐藤和夫・水野仲彦・竹丸勝朗・松本勝彦 (1968) 金華山の鳥類について, 鳥 18 (85), 356-378
- 46) 水谷知生・平侑子 (2018) 前掲 26)
- 47) 水谷知生・平侑子 (2023) 前掲 15)
- 48) 阿部真幸 (1997) 金華山画廊 (二) 絵図の系図①, 社報「金華山」38号  
阿部真幸 (1997) 金華山画廊 (二) 絵図の系図②, 社報「金華山」39号  
阿部真幸 (1998) 金華山画廊 (二) 絵図の系図③, 社報「金華山」40号  
阿部真幸 (1998) 金華山画廊 (二) 絵図の系図・補遺, 社報「金華山」41号
- 49) 菅原雪枝編 (2001) 前掲 29)
- 50) 東北歴史博物館編 (2010) 『絵画にみる江戸時代のみやぎ-名所と人々-』 東北歴史博物館, 10
- 51) 金華山黄金山神社 (1989) 前掲 25), 42-43
- 52) 金華山黄金山神社 (1989) 前掲 25), 44-45
- 53) 内島美奈子編 (2015) 『Nexus 展: 西南学院大学博物館 2015 年度春季特別展』 西南学院大学博物館, 20
- 54) 東北歴史博物館編 (2013) 『美しき東北の街並み-鳥のまなざし 吉田初三郎の世界-』 東北歴史博物館, 27-28
- 55) 東北歴史博物館編 (2013) 前掲 54), 31-32
- 56) 金華山の絵図について, 今回調査した各地の図書館等での所蔵状況や古地図の販売状況からみると, 『金華山明細絵図』『金華山縮図』の流通量が多かったと考えられる
- 57) 細部の描き方, 色の使い方などから2絵図は別の絵師によって描かれたと考えられ, 両者の関係は検討の必要がある。東京国立博物館蔵の『奥州金華山図』には名跡の紹介中に誤記があり, 誤記のない仙台市博物館蔵の『金華山図』



- が『奥州金華山図』を模写した可能性は低い
- 58) 阿部真幸(1997) 金華山画廊(二) 絵図の系図②, 社報「金華山」39号での推定。大金寺焼失については、1813(文化10)年、1818(文政元)年説があり、定かではないとされる(牡鹿町誌編さん委員会編(2002)『牡鹿町誌下巻』, 322)が、1813(文化10)年の焼失だとすると、1814(文化11)年以降の一連の『正面・背面図』や1868(明治元)年の『奥州金華山大金寺之図』では正方形の同じ姿で本社が描かれており、1813(文化10)年の焼失後、1814(文化11)年には速やかに新たな社殿が設けられ、その後大きく姿を変えることなく明治期に入ったこととなる。本社は1877(明治10)年から屋根の改造工事が始められたとされ(黄金山神社社務所(1931)『金華山小誌』, 12), 1891(明治24)年以降の銅版の『金華山明細絵図』『金華山略図』では正方形ではない形に描かれ、この時点で本社の外観は変わったと考えられる。なお、『金華山図』『奥州金華山図』で本社は正方形に描かれており、その外観をみる限りでは一連の『正面・背面図』と共通しており、両図に描かれた本社が一連の『正面・背面図』に描かれた本社の姿より前の姿と判断することは難しい
  - 59) 阿部真幸(2004) 金華山画廊(三) 鳥瞰図の巨匠吉田初三郎③, 社報「金華山」58号
  - 60) 宮城県港湾課(1970) 脚光浴びる「金華山港」, 港湾47巻8号, 51-53
  - 61) 石巻営林署(1934)『金華山の森林』

